

心が傷ついた子どもたちを救いたい！ ～支援団体「メッター」、宗派を超えた僧侶たちの活動～



一般社団法人「メッター」（ハーリ語で『慈悲』）。虐待やDV（ドメスティックバイオレンス）などの被害者のための駆け込み寺「メッターラボ」を運営し、心のケアや自立を支援するなど、様々な活動を行う。代表を務めるのは、真言宗僧侶の今城良瑞さんだ。今年9月に活動3年目を迎える「メッターラボ」は、在家の仲間らと異なる目標を掲げる——虐待などで親とは住むことができない子どもたちを養育する「ファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業）」の設立だ。

心の声に向き合う

今城さんの活動の原点は10年以上も前にさかのぼる。「私は在家出身。バブル全盛期に高校生生活を送り、進路について真剣に考えていなかった。そんな時、老いると肉体は滅ぶけれど、一生、生き抜く強さとなる精神力を身につけるにはどうすればいいのかと考え、『それには修行が必要だ！』と高野山大学に進学を決めた」と笑う。卒業後、修行を積み僧侶として兵庫県にある大本山中山寺に勤務。プライベートで親交がある

あつたアスリートの友人らの熱い生き方に刺激

を受け、自身も僧侶として利他行に励むべく、「心の相談員養成講習会」を受講した。そして、2005年に設立したNPO法人「HAPPY FORCE（ハッピーフォース）」では、不登校や引きこもりの子どもたちに、その後、会員制サービス「mixi（ミクシィ）」のコミュニティ「言えない心の傷」では、DVや虐待に悩む人の心の声に、寄り添ってきた。

長年、多くの相談者と関わりあう中で「現場で根本的な問題を解決したい」と、ネットからリアルへと活動の場を広げ、一般社団法人「メッター」を立ち上げる。法律で守られず行政支援を受けられない18歳以上のDV被害者のためのシェルター「メッターラボ」を約1年間運営した。すでに第1期入居者は卒業し、自立の道を歩み始めたという。

ファミリーホームは、2009年4月に里親制度や児童養護施設と並ぶ児童養護の新システムとして制度化された。里親は夫婦か片親で育てるのに対し、親となる養育者を3人以上配置することができる。一般的な住宅で開設でき、預かる児童の定員は5～6人と、里親が預かることのできる人数よりも、集團生活にはない家庭的な雰囲気の中で養育できるのが特徴だ。

「ファミリーホームは、養育者が固定されるため安定した関係が築けます。少人数なので子どもたちも家庭の温かさに触れられるという利点

現在も相談者の心の状態に合わせ、心理や法律の専門家のアドバイスや行政・民間サービス等を利用してながら、共に生き方を考える活動を行なうが、「今、まさに必要なのは大人になるのを耐えて待つのではなく、少しでも早い時期に子どもたちが安全な場所に身を置けるファミリー

ホームの存在」と、今城さんは主張する。ボロ

ボロになる前の段階で救済できれば、その後の彼らの人生が変わるのでないかと考えるからだ。

「現在進行形で親などから暴力を受けている場合、暴力 자체が無くなる限り問題は解決しません。虐待などの行為は過去のものであってもPTSDという名の心の傷がある人や、虐待が原因で精神状態が安定せず健全な社会生活を送るのが困難な人もいます」。

ファミリーホームは、2009年4月に里親制度や児童養護施設と並ぶ児童養護の新システムとして制度化された。里親は夫婦か片親で育てるのに対し、親となる養育者を3人以上配置することができる。一般的な住宅で開設でき、預かる児童の定員は5～6人と、里親が預かることのできる人数よりも、集團生活にはない家庭的な雰囲気の中で養育できるのが特徴だ。

「ファミリーホームは、養育者が固定されるた

め安定した関係が築けます。少人数なので子どもたちも家庭の温かさに触れられるという利点があるんです」といえ、目標額は人件費や住宅の購入、運営資金等を考えれば5千万円と設立には多額の資金を要する。現在も、ホームページなどを通じて賛助会員や寄付を募り、寄付金付きのTシャツ・自動販売機の設置などを通じても協力を呼びかけている。

今、自分がやりたいことをやるだけ

「慈悲」「利他」「菩薩道」など、社会貢献を示すような仏教語は色々とある。『仏教×社会貢献』は特殊なものではなく、仏道を歩む者として、ごく当たり前の姿」と今城さんは話す。「僧侶として、自らを鍛え精進すること、ご供養、ご祈祷などの儀式儀礼、祈りを捧げることなど、宗教的な活動をするのが当然のことなら、私のメッターを通しての社会的な活動もまた、自らの修行の一環だと考えています」。

日本では、養護を受ける児童のうち、約1割が家庭的養護である「里親」での養育を受けるが、9割は数十人の大所帯となる「児童養護施設」で育てられる。他の先進国では、この比率が逆転する。それほど里親やファミリーホームが定着し、子どもは家庭的環境の中で育つほうが良いという考えが根付いている。

「お坊さんとして、やりたいことをやっているだけなんです。最終的にはファミリーホーム 자체が必要とされなくなる社会になれば」と今城さんの強い思いは、近い将来、ファミリーホームの設立という形で実を結ぶに違いない。それは、新しいお寺の姿が誕生する瞬間だとも言えるだろ。

（取材・文：山下敦子）

家族の温かさを知る「ファミリーホーム」

現在も相談者の心の状態に合わせ、心理や法律の専門家のアドバイスや行政・民間サービス等を利用してながら、共に生き方を考える活動を行なうが、「今、まさに必要なのは大人になるのを耐えて待つのではなく、少しでも早い時期に子どもたちが安全な場所に身を置けるファミリー

（取材・文：山下敦子）

